

【原著論文】

教職課程履修者が描く教師像と教育実習の捉え方について

—学部3年生を対象として—

鈴木悠介¹⁾, 續木智彦²⁾, 藤田主一¹⁾

¹⁾ 日本体育大学教職教育Ⅱ研究室

²⁾ 日本体育大学大学院博士後期課程

The teacher image and perceptions of teaching practice of students on a teacher-training curriculum

— A study of 3rd year undergraduate students —

Yusuke SUZUKI, Tomohiko TSUZUKI and Syuichi FUJITA

Abstract: In recent years, problems concerning the manners and morals during teaching practice have come to the fore. As matters stand, it seems to be necessary for those aiming to be teachers to have a clear image of what a teacher is. In this context, the aim of the present study was to examine the two perspectives of (1) how the image of a teacher was portrayed and (2) how teaching practice was perceived. Participants in the study were 396 pre-service teacher trainees at A University, who were aiming to obtain a teaching license and preparing for teaching practice the following year. Content of the questionnaire focused on the 2 perspectives of “teacher image” and “teaching practice”. Factor analysis was conducted on each of these, eliciting 4 factors and 3 factors respectively. Each factor was then compared to the degree of desire to become a teacher (4 groups), producing the following results.

1) Teacher image and degree of desire to be a teacher

- Factor analysis was conducted on 25 items related to teacher image, producing the 4 factors, “relations”, “busyness”, “experiential activities” and “profession”.
- Students aiming to be teachers showed strong awareness of relationships.
- Students aiming to be teachers recognized how busy teachers are.

2) Teaching practice and degree of desire to be a teacher

- Factor analysis was conducted on 25 items related to teaching practice, producing the 3 factors, “attitude as a trainee teacher”, “expectations of teaching practice” and “anxiety about teaching practice”.
- Students aiming to be teachers were conscious of attitudes as a trainee teacher.
- Students aiming to be teachers had expectations of teaching practice.

(Received: June 20, 2011 Accepted: September 26, 2011)

Key words: teacher image, teaching practice, a teacher-training curriculum

キーワード：教師像，教育実習，教職課程

1. 緒 言

教員免許状を取得するため、教員をめざす者は教育実習を行わなければならない。その教育実習の果たす役割については、さまざま研究がなされている。

山口¹²⁾は、教育実習の重要な目的の一つとして、実習生が現職の教員や他の実習生の授業を十分に観察することであると述べている。また、中央教育審議会答

申²⁾、の中で教育実習について言及し「大学の教員と実習校の教員が連携して指導に当たる機会を積極的に取り入れることが必要である」としている。つまり、教育改革の一つとして教育実習のもつ役割を明確に位置づけていかななくてはならない。

さらに教育実習は、実習先の教員、児童・生徒、さらには同じ学校に配属された他の実習生と関わりながら様々な経験をする結果として、抑鬱や怒りさらには

新たな不安といった心理的な反応が生ずることを否定できない⁹⁾。

このように、3週間ないし4週間の短い期間に、児童・生徒との関わり以外にも教師としての悩みを感じることも教育実習の役割として必要なことであろう。

次に、教育実習生の意識に着目を見ると、全ての教育実習が大学卒業後に教員となるわけではない。測上⁸⁾は、教育実習生の教師志望度の変化を調査し、61.2%が実習後に教員志望度を高める方向に変化し、逆に15.1%が教師志望度を低下させると報告している。つまり、教育実習をとおして、教員としての道を諦める、またはやめる教育実習生もいるのである。この場合、自分の進路を決定する手法として教育実習を位置づけていることが考えられるが、実習校にとっては、大きな負担を強いられることになり、問題である。このような態度を持つ学生が増えることにより、さまざまな今日の教育実習の問題点が浮上し、服装、身なりに加えて、指導教員への態度、児童・生徒へのマナーなどの悪さが多く見受けられるようになった³⁾。これらの問題が浮上すると、個人の問題だけでなく大学としての問題へと発展することから、実習校、大学、それに教育実習生の全てが問題を抱えることになり、教育実習の価値を下げてしまう恐れがあると思われる。そこで、教育実習生を送り出す大学側の責任は大きいと考えられることから、さまざまな取り組みがなされている。

たとえば、中央教育審議会答申²⁾において、平成20年より指導力や専門性の高い教員を育てるために「教職大学院」制度が創設された。教職大学院とは、学部段階での資質能力を修得した者の中から、さらに実践的な指導力・展開力を備え、新しい学校づくりの有力な一員となり得る新人教員の養成と、現職教員を対象に、地域や学校における指導的役割を果たし得る教員等として不可欠な確かな指導理論と優れた実践力・応用力を備えたスクールリーダーの養成をすることである。

また、中央教育審議会答申²⁾では課程認定大学に対して、将来の教員として最小限必要な資質や能力を身につけたか否かを確認する「教職実践演習」の申請を求め、平成22年度入学生から必修科目として設定した。そこでは、「課程認定大学が自らの養成する教師像到達目標に照らし合わせて最終的に確認するのもの」と提言されている。

これらの現状を踏まえ、学校現場が求めている、また学校が担っている今日的な教育課題を遂行していく⁵⁾ために、大学は実践的な指導力を備えた教師の養成に力を注ぐ必要があるといえる。そのために教育実習の果たす役割は大きく、教育実習に行く前に学生は

「このような教師になりたい」という教師像をつくるために何をしなければならないかを考えていかねばならない。以上のように、学生は教師像をどのように捉えているのか、また教育実習をどのように位置づけているのだろうかという点について検討する必要がある。

そこで本調査は、教員免許状の取得をめざす3年生を対象に、検討1では①教師像をどのように描いているのか、検討2では②教育実習をどのように捉えているのかの2つの視点から検討することを目的とする。

2. 方 法

調査対象者は、A大学の教職課程履修者の3年生396名（男子271名〔(2)においては欠損データのため270名〕、女子125名）であった。調査期日は2006年6月に授業時間を利用して行った。本調査は授業で調査に協力をしてもらえる学生のみを依頼し、授業評価に影響を及ぼさない旨を伝え倫理上の配慮を行った。また、調査は教室にいる学生を対象としているため、集合調査法にて行った。

フェースシートは、「学年、性別、教職課程を履修している学生が教員になりたいレベル（以下：教員志望度）」であった。質問項目は先行研究を参考に選定し、「教師像に関する調査」25項目、「教育実習に関する調査」25項目からなる質問紙を作成した。本調査では、「教師について、あなたはどのように考えていますか」「教育実習についてどのように考えていますか」という教示を与えた。回答には5件法を用いて、「5. 非常にそう思う」―「1. 全くそう思わない」とした。分析は、解釈しやすくするために、検討1「教師像」検討2「教育実習」とともに構成する因子をそれぞれ抽出した。次に教員志望度（4段階評定）をもとに「教師像」「教育実習」の意識の違いを明らかにするために因子ごとに比較を行った。統計はSPSS 16.0J for Windowsを用いて、因子分析、対応のない一要因の分散分析を行った。

3. 結 果

1) 検討1（教師像と教員志望度について）

(1) 因子分析

教師像に関する25項目について、主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、固有値1.0以上を示した4因子を抽出した。項目数は、各々5, 2, 2, 2項目で、計11項目であった。この因子数は、多くの角度から教師像を捉えるためには妥当であると考えられる。プロマックス回転を行った結果を寄与率の高いものから表1に示した。また、因子の独立性を保つために因子間相関も同様に示した。

第1因子は、「教師は生徒から尊敬されている」「教

表 1 教師像に関する因子分析表

項目番号	項目内容	因子負荷量			
		I	II	III	IV
関係					
12	教師は生徒から尊敬されている	.86	-.02	-.02	.00
15	教師は生徒の様子をいろいろ知っている	.73	.10	.01	.01
22	教師は生徒の悩みを聞いている	.72	.04	.05	-.17
25	教師は保護者から信頼されている	.66	-.07	-.05	-.04
5	教師は生徒のモデルになっている	.53	-.03	.00	.30
多忙さ					
9	教師は忙しい仕事である	-.01	.81	.03	.05
11	教師は苦勞が多い職業である	.07	.73	-.03	-.02
体験活動					
23	教師にはボランティア活動の経験が必要である	.02	-.02	.76	-.14
6	教師には老人介護や障害者支援などの経験が必要である	-.01	.03	.72	.16
職業					
4	教師は安定している職業である	-.02	.15	-.02	.40
14	教師の仕事には自由がある	.01	-.31	.03	.37
因子間相関			I	II	III
			II	.33	
			III	.48	.23
			IV	.56	.41
					.56

師は生徒の様子をいろいろ知っている」などという項目がみられることから、「関係」因子と命名した。第2因子は、「教師は忙しい仕事である」「教師は苦勞が多い職業である」などという項目がみられることから「多忙さ」因子と命名した。第3因子は、「教師にはボランティア活動の経験が必要である」「教師には老人介護や障害者支援などの経験が必要である」などという項目がみられることから「体験活動」因子と命名した。第4因子は、「教師は安定している職業である」「教師の仕事には自由がある」などという項目がみられることから、「職業」因子と命名した。

信頼性は、クロンバックの α 係数を算出し「関係」因子で.80、「多忙さ」因子で.79、「体験活動」因子で.84、「職業」因子で.77を示した。

(2) 教員志望度

図1は、「関係」因子得点における教員志望度を示したものである。対応のない一要因の分散分析を行った結果、有意差が認められた ($F(3)=17.54, p<.001$)。そして、Bonferroni法を用いた多重比較を行った結果、条件1より条件2、条件1より条件3、条件1より条件4、が有意に低い値を示した ($Mse=11.34, 5\%$ 水準)。

図2は、「多忙さ」因子得点における教員志望度を示したものである。対応のない一要因の分散分析を行った結果、有意差が認められた ($F(3)=17.54, p<.001$)。そして、Bonferroni法を用いた多重比較を行った結果、条件1より条件2、条件1より条件4が有意に低い値を示した ($Mse=11.34, 5\%$ 水準)。

図3は、「体験活動」因子得点における教員志望度を

示したものである。対応のない一要因の分散分析を行った結果、有意差が認められた ($F(3)=3.59, p<.05$)。そして、Bonferroni法を用いた多重比較を行った結果、条件1より条件2が有意に低い値を示した ($Mse=2.8, 5\%$ 水準)。

図4は、「職業」因子得点における教員志望度を示したものである。対応のない一要因の分散分析を行った結果、有意差は認められなかった ($F(3)=1.67, p>.05$)。

2) 検討2 (教育実習と教員志望度について)

(1) 因子分析

教師像と同様に、教育実習に関する25項目について、主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、固有値1.0以上を示した3因子を抽出した。項目数は、各々9、7、4項目で計20項目であった。プロマックス回転を行った結果を寄与率の高いものから表2に示した。また、因子の独立性を保つために因子間相関も同様に示した。

第1因子は、「指導の先生を信頼したい」という項目がみられることから、「実習生としての態度」因子と命名した。第2因子は、「実習が終わったら早く本物の教師になる」という項目がみられることから「実習に対する期待」因子と命名した。第3因子は、「他の実習生の様子が気になる」という項目がみられることから「実習に対する不安」因子と命名した。信頼性は、クロンバックの α 係数を算出したところ、「実習生としての態度」因子は.80、「実習に対する期待」因子は.81、「実習に対する不安」因子は.77を示した。

教職課程履修者が描く教師像と教育実習の捉え方について

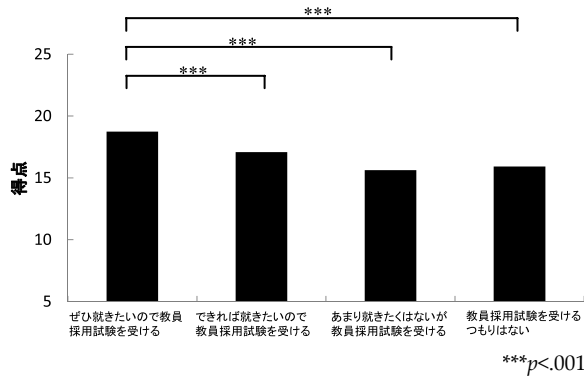


図1 「関係」因子得点における教員志望度

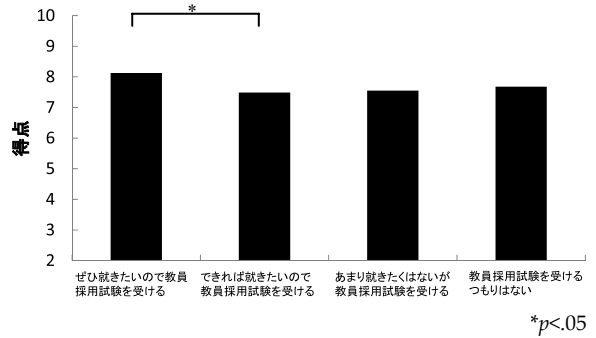


図3 「体験活動」因子得点における教員志望度

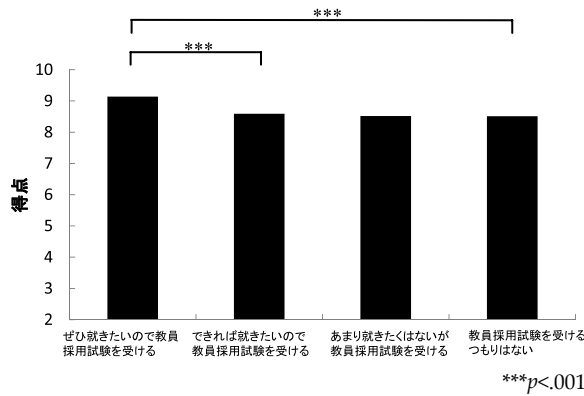


図2 「多忙さ」因子得点における教員志望度

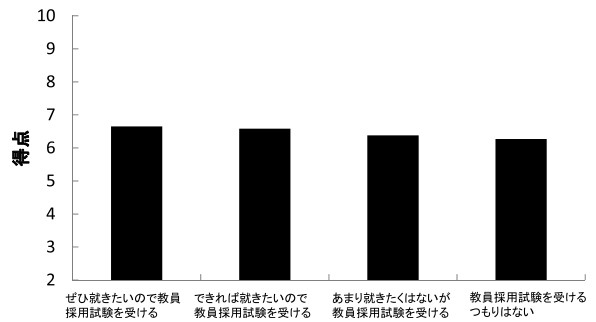


図4 「職業」因子得点における教員志望度

表2 教育実習に関する因子分析表

項目番号	項目内容	因子負荷量		
		I	II	III
実習生としての態度				
21	指導の先生を信頼したい	.77	-.09	-.11
18	教職員の指示にはきちんとしたがう	.74	-.11	-.18
13	自分が教師に向いているかわかる	.58	-.01	.19
23	校長先生は教職員をうまくまとめているはずだ	.50	.05	-.08
22	生徒の気持ちがかえられるかどうか心配だ	.50	-.16	.27
11	実習中の記録はきちんとつける	.49	.17	.08
14	学校という組織が理解できる	.49	.10	.11
19	先生同士の人間関係がわかるはずだ	.47	.04	.08
25	実習中に毎日予習する	.39	.28	-.03
実習に対する期待				
7	実習が終わったら早く本物の教師になる	-.13	.78	.10
17	できるだけ多くの授業を実習したい	.04	.71	-.12
16	実習が終わってしまうのはさみしいはずだ	.01	.65	-.04
24	教員採用試験を受験する	.04	.57	.10
6	実習中の生活は楽しいに違いない	-.14	.56	-.03
4	積極的に生徒に話しかける	.13	.56	.03
15	生徒の名前を早く覚える	.27	.39	.08
実習に対する不安				
12	他の実習生の様子が気になる	.14	.11	.54
8	指導の先生が親切かどうか心配だ	.16	.00	.51
5	実習校への手続きは面倒そうだ	-.23	-.01	.51
1	実習期間が長い	-.17	-.29	.37
因子間相関		I	II	
		II	.64	
		III	.06 -.13	

(2) 教員志望度

図5は、「教員としての態度」因子得点における教員志望度を示したものである。対応のない一要因の分散分析を行った結果、有意差が認められた ($F(3)=18.237, p<.001$)。そして、Bonferroni法を用いた多重比較を行った結果、条件1より条件2、条件1より条件3、条件1より条件4、条件2より条件4が有意に低い値を示した ($Mse=22.026, 5\%$ 水準)。

図6は、「実習に対する期待」因子得点における教員志望度を示したものである。対応のない一要因の分散分析を行った結果、有意差が認められた ($F(3)=97.316, p<.001$)。そして、Bonferroni法を用いた多重比較を行った結果、条件1より条件2、条件1より条件3、条件1より条件4、条件2より条件3、条件2より条件4が有意に低い値を示した ($Mse=16.033, 5\%$ 水準)。

図7は、「実習に対する不安」因子得点における教員志望度を示したものである。対応のない一要因の分散分析を行った結果、有意差は認められなかった。

4. 考 察

1) 検討1

検討1では教師像をどのように描いているのかを明らかとした。「関係」因子をみても、教員志望度

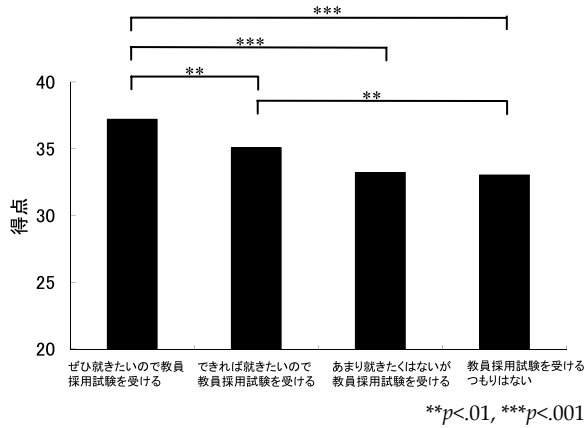


図5 「実習生としての態度」因子得点における教員志望度

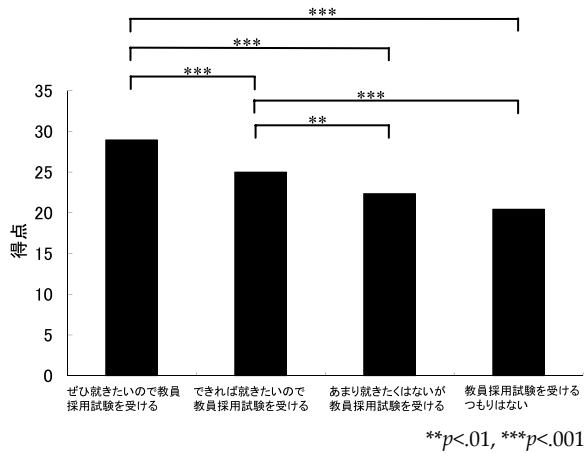


図6 「実習に対する期待」因子得点における教員志望度

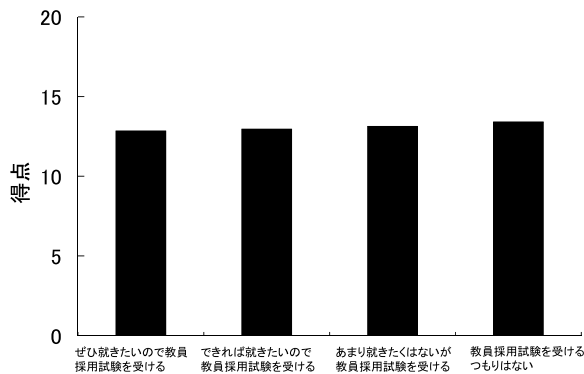


図7 「実習に対する不安」因子得点における教員志望度

の高い人は低い人に比べて、教員、保護者、生徒児童との関係について大切に考えている。大西⁷⁾は、教員と保護者の関係についてコミュニケーションの難しさを取りあげており、さらに学校の現状が変化を遂げていることを指摘している。言い方を変えると、以前であれば教員と保護者との関係において、コミュニケーション不足になることはなかったと考えられる。一つには、夫婦共働きのケースから保護者が学校へ行く機会の減少が挙げられる。また、近年モンスターペアレ

ントの問題⁷⁾も浮上して、教員と保護者の関係を構築しにくい現状もある。このような情報から、教員をめざす者にとって人との関係づくりや維持していくことは、非常に敏感に感じていると推察される。

「多忙さ」因子をみると、教員志望度の高い人は教員の大変さ忙しさについて強く認識していると考えられる。しかしながら全体的に得点の高い得点を示していることから、教員が忙しい現状については認識されてきているといえる¹¹⁾。もっとも、「教員は忙しい」という認識が先行してしまうと、教員をめざす学生の減少につながってしまいかねない。やはり、在学中に多忙さを認識しつつも、教員をめざすにあたり教師像を捉えられるような環境を整える必要性はあるといえる。

2) 検討2

検討2では、教育実習をどのように捉えているかを明らかとした。

田村ら¹⁰⁾は、教員採用試験受験者群は非受験者群に比べ、教師像を肯定的に捉え職業感、使命感を強く感じており、教育実習には肯定的で否定感が低い傾向があることを指摘している。本研究においては教員志望度が高い学生ほど「実習生としての態度」因子の得点が高かったと推察される。つまり、教員としての心構えができていないのではないかと考えられる。

また今林⁴⁾は教員志望度が高い学生は、教育実習の中で授業のつくり方や指導案の書き方を学ぼうとする。一方で、志望動機の低い学生は教育実習を困難な出来事として捉え、人間的な成長、社会人としての自覚を獲得するための手段としていると指摘している。したがって教員志望度が高い学生ほど「実習に対する期待」の得点が高かったと推察される。

「実習に対する不安」因子では、教育実習では、実習先の教員、児童・生徒、さらには同じ学校に配属された他の実習生と関わりながら様々な事態を経験することになる。その結果として抑鬱や怒りさらには新たな不安といった心理的な反応が生ずることを否定できない¹⁹⁾。教育実習を前にした教員養成課程の多くの学生が教育実習に対して不安を感じている³⁾ことから、「教員に対する不安」因子で教員志望度による差がみられなかったと思われる。

3) 課題

現在「教員にはなれなくても教員免許状だけはとっておこう」とする学生の状況がある⁵⁾。

また、森ら⁶⁾は学生の学習意欲に関して、「大学で学びたい内容」をもって入学してきたとしても、半分の者は1年でそれが崩れると指摘している。

このような現状では、本来の大学教育を行う上で問

題が多く発生してしまい、高い意識で授業に受け取ることができず教師像を描けない可能性がある。しかし、教育実習は教育実習生が実習後に教員志望度を高める方向に変化するという報告⁵⁾があることから、教育実習をすることの意味はとて大きいといえる。

一方で、教育実習の問題点として、実習生の態度やマナーが問題点になることが多いといわれている³⁾。やはり、これらの問題を解決していくには、教員の資質を高めることはもちろん、明確な教師像を描くことのできるような大学教育を行っていく必要がある。

本研究の対象は、教職課程履修者3年生であったため、教育実習後の課題については検討することができなかった。そのため、今後は1-4年生の教職課程履修者が教師像をどのように描いているのか、そして教育実習をどのように捉えているのか、また捉えたのかを知ることで縦断的な検討を図る必要があり、さらには今後の大学教育の在り方を問い直す機会でもあると考ええる。

5. 結 論

本研究は、A大学の教職課程を履修しており、教員免許状の取得をめざす3年生を対象に、①教師像をどのように描いているか②教育実習についてどのように捉えているのかについて検討を行った。

結果は以下のとおりであった。

1) 教師像と教員志望度

- 教師像に関する25項目について因子分析を行った結果、「関係」「多忙さ」「体験活動」「職業」の4因子が抽出された。
- 教員をめざしている学生は、関係性について強く意識をしている。
- 教員をめざしている学生は、教員の忙しさについて認識をしている。

2) 教育実習と教員志望度

- 教育実習に関する25項目について因子分析を行った結果、「実習生としての態度」、「実習に対する期待」「実習に対する不安」の3因子が抽出された。
- 教員をめざしている学生は、実習生としての態度を意識している。
- 教員をめざしている学生は、教育実習にたいして期待している。

以上のことから、3年生の教師像の描いた内容についてと1年後に控えた教育実習の捉え方について知ることができた。今後の課題としては、1-4年生のデータを収集することで縦断的な検討を行っていく。

6. 参考・引用文献

- 秋光恵子：教育実習経験が教師に必要な資質能力に関する自信と教師志望度に及ぼす影響—実地教育Ⅲを履修した学部学生と大学院生の比較—, 学校教育学研究, 23, 43-52, 2011.
- 中央教育審議会答申：今後の教員養成・免許制度の在り方について, 2006.
- 長谷川順一, 浅野文恵：学校教育教員養成課程3年次生の教育実習不安(3)—教科の授業以外の事項について—, 香川大学教育実践総合研究, 16, 181-188, 2006.
- 今林俊一, 川畑秀明, 白尾秀隆：教育実地研究に関する教育心理学的研究(6)—教員養成学部生の教師効力感の変容について—, 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 14, 85-99, 2004.
- 水田嘉美：保健体育科教育法Ⅰ・Ⅱ, 教育実習事後指導を通して, 東海大学紀要, 37, 135-137, 2007.
- 森 恭子, 後藤和史：教員免許等の資格取得を目指す学生のアイデンティティと特徴, 瀬木学園紀要, 5, 9, 4-12, 2011.
- 大西勝也：学校の現状 神奈川大学心理・教育研究論集(29) 99-105, 2009.
- 舘上克義：教育実践研究と心理学, 日本教育心理学会発表論文集(36) 50-51, 1995.
- 坂田成輝, 音山若穂, 古屋 健：教育実習生のストレスに関する一研究—教育実習ストレス尺度の開発—, 教育心理学研究, 47, 335-345, 1999.
- 田村和子, 平野麻依, 井上果子, 福田幸男：教育実習体験が教員志望動機に及ぼす影響(6), 日本教育心理学会総会発表論文集, (49), 73, 2007.
- 和田美和子, 佐藤嘉晃, 藤田圭一：教職課程履修学生の教育観に関する研究—特に、「履修動機」と「教育実習」について—, 城西大学女子短期大学部紀要(19) 1, 45-51, 2002.
- 山口幸男：教員養成学部における体系的な教育実習カリキュラムの構築と実践・評価—群馬大学教育学部の場合—, 日本教育大学協会研究年報(28) 177-188, 2010.

〈連絡先〉

著者名：鈴木悠介
住 所：東京都世田谷区深沢7-1-1
所 属：日本体育大学教職教育Ⅱ研究室
E-mail アドレス：y-suzuki@nittai.ac.jp